

「私のほんとに好きな人」

— 2稿 —

2026/02/08

山極 瞭一朗

〈人物表〉

時野ときの 雨音あまね

(27)

会社員

日暮ひぐれ 春哉はるぢや

(27)

雨音の元カレ・御曹司

雲井くもい 杏南あんな

(28)

春哉の今カノ

風間かざま 英恵はなえ

(30)

雨音の先輩

1. (回想) 道1 (夜)

土砂降りの雨。

時野雨音(27)は傘も差さずに、何かに急かされるようにして、全力で走っている。

2. (回想) オフィス・あるフロア (夜)

日暮春哉(27)、たくさんの人たちに囲まれている。

花束を渡されると、満面の笑みで受け取って、

春哉 「本当にお世話になりました」

女性 「アメリカでも頑張ってるね」

春哉 「必ず成長して帰ってきます」

男性 「困ったことがあればいつでも連絡してくださいよ、御曹司」

春哉 「おい、呼び方」

男性 「あ、つい」

春哉 「ま、でも、連絡するよ、ありがとう」

春哉はみなに見送られ、出ていく。

3. (回想) 道 (夜)

雨音、勢いよく水溜りを踏む。

激しく飛び散る水しぶき。

と、雨音の脇を高級外車が通過する。

後部座席に雲井杏南(28)が座っている。雨音を

さっと一瞥。薄く笑む。

雨音は気づかず走る。

4. (回想) オフィス・入口・中 (夜)

エレベーターから、花束を抱えた春哉が出てくる。

つかつかと進んでいると、ふいに足を止め、振り返る。

会社のロゴが壁面に記されている。

春哉、姿勢を正し、深々と一礼。

(回想) オフィス・入口・外(昼)

社屋の前に高級外車が停車する。

しばらくして、雨音がやって来る。

すると、社屋から春哉が出てくる。

雨音、駆け出そうとするが……

雨音 「春哉く——」

やめる。咄嗟に柱の陰に身を隠す。

パサッと真つ赤な傘が開いて、後部座席から杏南が

出てくる。

春哉、微笑んで近づく。

春哉 「杏南さん」

杏南、にこっと笑って、

杏南 「春哉、お疲れ様」

と、春哉に傘を握らせると、抱きしめる。

雨音、ハッとして息を呑む。

春哉 「杏南さん……？」

杏南 「あったかい」

春哉 「外ですよ」

杏南 「さみしい」

ぎゅっとする。

春哉 「永遠の別れじゃないです。半年だけです」

杏南 「毎日は見えない、今までみたいに」

春哉 「電話します」

杏南、不意に春哉を見つめて、

杏南 「キスして」

たじろぐ春哉。

そんな彼に杏南は屈託のない笑みを見せて、

杏南 「好きでしょ」

春哉 「好きだけど」

杏南 「誰も見てないよ」

雨音、ぎゅっと拳を握りしめる。

杏南 「ね、ダメ？」

春哉、思わず顔を綻ばせて、

春哉 「ダメじゃない」

と、キスをする。

雨音は頬を歪めて、

雨音 「……春哉くん」

徐にスマホを手に取り、耳に当てる。

春哉のスマホ、バイブ着信。だが春哉は気づかない。

杏南、とろけるような笑みを浮かべて、再び春哉を

抱きしめる。

春哉 「杏南さん」

杏南、柱の陰を一瞥。ニヤリと笑う。

雨音はぎゅっとスマホを握る。

雨は一層激しさを増す。

6. カフェ・外観（昼）

雲ひとつない青空。

7. カフェ・店内（昼）

賑わっている。

窓際の席で、雨音は風間英恵（30）と談笑している。

英恵 「元カレね」

雨音 「別れたくて別れたわけじゃないんです。仕方なくて」

英恵 「何年前？」

雨音 「8年」

英恵 「それで再会？」

雨音 「去年」

英恵 「彼女いるんでしょう？」

雨音 「はい」

英恵 「絶対その女雨音のこと気づいてるよ。あの日言おうとしたりたんでしょ？」

雨音、苦笑して、コーヒーを啜る。

英恵 「だからキスしたの。見せつけたかったの」

雨音 「許せません」

英恵、ふっと笑みをこぼして、

英恵 「どうするの?」

雨音、ニヤリと笑う。

英恵 「策ありね」

雨音、ごくりとコーヒーを飲む。

8. 雨音の家・寝室（夜）

雨音、ベッドに寝転がりながら、電話している。

雨音 「そっちって昼?」

春哉の声 「朝かな」

雨音 「起きれんだ」

春哉の声 「いくつだと思ってんだよ」

雨音 「えー、10歳?」

春哉の声 「おいおい、だったら雨音もな」

雨音、嬉しそうに笑う。

春哉の笑い声も電話越しに聞こえる。

9. 春哉の家・リビング（朝）

窓の外はニューヨークの街並みが広がる。

春哉、せかせかと朝食の支度をしながら、話してい

る。

テーブルには、スピーカー状態のスマホ。

新たな着信が来る。

春哉、さっと手に取り、確認。

画面、『杏南』とある。

春哉 「あ、ごめん。電話」

雨音の声 「ん、誰から?」

春哉 「ああ、うん。すぐ折り——」

雨音の声 「待てない。私、明日朝早い」

春哉 「ん?」

雨音の声 「切ったら寝ちやうかも」

春哉、苦笑して、座る。

雨音の声 「そうしないと起きれないじゃん?」

春哉 「子供かよ」

電話越しにいたずらっぽく笑う雨音の声が聞こえる。

春哉、まんざらでもない様子。

雨音の声「ね、もう少し、ダメ？」

春哉、ふーっと息を吐き、杏南からの着信を切る。

春哉 「ダメじゃない」

10. 雨音の家・寝室（夜）

雨音 「あ、そうだ。来月帰ってくるよね。時間決まった？」

春哉の声「うん」

雨音 「迎えに行くよ」

春哉の声「まじ？」

雨音 「まじ、大まじ」

と、ニヤリと笑う。

11. 道2（昼）

車が1台駆け抜ける。

その上を飛行機が通り過ぎる。

12. 空港・旅客ターミナル（昼）

コロコロと回るキャスター。淀みなく進んでいく。

すると、ピタッと止まる。

サングラスをかけた春哉、窓の外を見やると、サン

グラスを外す。

春哉 「晴れてる」

ニヤリと笑って、歩き出す。

13. 空港・エントランス・外（昼）

春哉が出てくる。

雨音の声 「春哉くん」

春哉、ハツとして振り返る。

向こうから雨音が駆けてくる。

春哉 「雨音」

雨音、春哉の前で止まると、にっこりと笑って、

雨音 「おかえり」

春哉 「おう」

杏南の声「春哉」

反対側から杏南が堂々とした足取りでやって来る。そして、雨音を一瞥すると、刹那頬を歪める。が、すぐに春哉に向き直って笑みを見せる。

杏南 「思ったより早かったね」

春哉、雨音を気にしながら、

春哉 「ま、まあ、うん」

杏南 「行く」

と、春哉の腕を取る。ニヤッと口角をあげると、半ば強引に春哉とともに歩いていく。

雨音、いてもたってもいられず、

雨音 「春哉」

春哉、思わず立ち止まって振り返る。その拍子に杏南の手が離れる。

雨音、さっと近づき、そっと春哉にキスをする。

杏南、ハッとして息を呑む。

雨音、春哉から離れて、

雨音 「ダメ？」

見つめ合う雨音と春哉。そこには2人だけの時間が流れているように……

春哉 「ダメじゃ——」

杏南 「何してんの」

いきり立った杏南、春哉を連れて立ち去る。

雨音 「待ってて、春哉。必ず奪うから」

雨音、去り行く春哉を見つめ続ける。

(おわり)